

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

地域づくりと社会教育主事の役割

—地域の子どもたちと共に育むネットワークづくりの実践—

中泉 理奈

提案・地域づくりの視点で学習や活動の支援を考えてみましょう。

いることについて述べます。
地域をつなぐ社会教育主事の役割

荒川区では、平成21年度から、

地域交流事業の新規立ち上げまたは

活動の充実を行う地域活動団体へ

3年間に限り補助金を交付する地

域教育力向上支援事業「あらかわ

子ミニティフェス」が開催されました。

この催しは、地域で子どもを育む活動をしている団体が実行委員会を立ち上げ、17団体が参画し企画・運営を行いました。

当日は、およそ700名の参加があり、地域の子どもや大人が交流し、たくさんの笑顔が見られた一日となりました。

(写真1・2)
本稿では、地域活動団体がネットワークをつくり主催する事業について地域づくりの視点で振り返り、社会教育主事（以下、社教主事）の役割と学習・活動を支援する際に気づいたことや心がけて



写真1：「子ミュフェス」は午前中から多くの人で賑わった。外会場には、写真の段ボール遊びのほか、おもちゃの交換会や紙芝居、モルックなど、地域の子どもや大人が遊びを通して交流する機会となった。



写真2：午前中の体育館では、ボードゲーム遊びと手づくりのおもちゃをつくって遊ぶコーナーがあった。午後は、バルーンアートや講談教室などを開催し、さまざまな体験ができる一日となった。

多くの方に伝えたいと思い「子ミニティ事業」という愛称名を提案。その後4年間事業を担当しました。これまでにおよそ30団体が実行委員会を活用し、地域で活動をひろげています。

事業開始後10年近くたった平成30年5月、当時の社教主事が、補助金を活用した各団体に呼びかけ、情報交換と話し合いの場を持ちました。私はその社教主事から、補助金を交付する3年間だけではなくその後もその活動を支援し、

横のつながりができたことで、横のつながりができたことで、

冒険遊びの活動に紙芝居の活動が参加したり、子どもや親子の居場所の中で手作りおもちゃの活動ができたりしています。つながることで各団体の活動内容を充実させることができ、一緒に活動する中で情報交換がされています。

私は、コロナ禍以前からこのようないい交流があつたことにより、コロナ禍でもお互いに励まし、情報交換がされ、活動継続の一助となります。

当時の社教主事の横のつながりづくりの呼びかけは、とても重要な交換があつたことにより、コロナ禍でもお互いに励まし、情報交換がされ、活動継続の一助となることがあります。当時の社教主事の横のつながりづくりの呼びかけは、とても重

要であったと改めて感じ、人や地域をつなぐコーディネートは社教主事の重要な役割だと認識しています。

実行委員会では、「コロナ禍、フェスティバル（イベント形式）」という形でなくとも、子どもたちの体験活動を大切し、直接的な関わりが持てる機会をつくることが必要なのではないか。」

「子どもたちはワクチン接種ができないことや、乳幼児はマスクが直接の関わりはコロナ感染が心配である」など、さまざまな意見が出されました。

その一方で、「まず各団体の活動が十分に実施できるようにした

「子ミュフェス」から見えた社会

教育と地域づくり

私は令和2年度から社教主事となりこの事業に関わっています。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で各事業の中止が相次いでいました。そこで、実行委員長と相談し、各団体にメ

活動をつなぎ・ひろげていくことで、さらに地域の教育力向上につなげたいという思いを伺いました。さらに、平成29年度に策定した「第3次生涯学習推進計画」で掲げた基本理念「学びによる生涯活躍のまちあらかわ」を実現するための4つの視点「学ぶつなぐ活かすひろげる」について、各団体内で学びの好循環が生まれるよう、子ミニティ事業活用団体の横のつながりをつくり、活動をひろげることで具現化したいという強い願いがあつたと伺っています。

情報や意見の交換を重ね、各団体が一堂に介し地域の子どもや親子に向けたイベント実施に向けて「子ミュフェス」実行委員会がそ年の8月に立ち上りました。

長年、子ども会活動を続けるいの第1回の実行委員長は、「こんなにたくさんの団体が荒川区の子どもたちのために活動しているのですね。本当にうれしいし、とても心強いわ！」と語っていたそうでした。

横のつながりができたことで、



参考写真1：令和3年度コロナ禍の「子ミュフェス」は、活動紹介パンフレットを作成した。

「子どもたちはワクチン接種ができないことや、乳幼児はマスクが直接の関わりはコロナ感染が心配である」など、さまざまな意見が出されました。

話し合いを重ねた結果、令和3年度の「子ミュフェス」は、各団体の情報を発信するパンフレットの作成と情報発信のパネル展を実施することになりました（参考写真1）。完成したパンフレットは、実行委員の皆さまが発送の仕分けや準備を行い、区施設や区内の保育園、幼稚園、小学校へ配布しま

動が十分に実施できるようにした

このようにコロナ禍においても「子ミュフェス」の取り組みを通じて、地域の課題や人・地域への思いを交換することで、互いに知り合い、つながっています。この一連の営みは、地域住民が主体となつて住みやすい地域をつくる地域づくりと言えるのではないでしょうか。地域の子どもたちの健やかな成長を願つて活動している皆さまが集まり、その時々の状況に合わせて、今、何ができるかを考える姿勢や柔軟な取り組みか

ら、私は地域がつくられていることを感じました。ⁱⁱ

「子ミュフェス」で大切にしたいこと

「子ミュフェス」で大切にしたいこと

子どもも大人も生活している。子どもを中心に考えた活動。子どもたちの直接体験と子どもや親子の他者との交流。子どもたちがおもいっきり遊べる場。

子どもも大人も生活している。うメッセージを伝えたいという想いを伝えたい。いから「おもいっきりあそぼう！」をテーマに地域交流イベント型の開催することになりました。(参照2)

2022-12 社会教育-60



写真3：「子ミュフェス」実行委員会の様子。集合とオンラインのハイブリッド形式で話し合いを行った。

令和4年度は、ウィズコロナで各団体の活動が始動する中、「子ミュフェス」実施に向け5月から9月までに4回の実行委員会を行いました。私は実行委員長と毎回の流れを確認しながら、会議の進行をサポートしました。(写真3)はじめに、「子ミュフェス」で大切にしたいことやこの組織の特徴を改めて確認しました。実施することが目的にならないようにし、変化が激しい時代に対応するために必要な話し合いで。話し合いで、次の意見が出されました。

（子どもたちの現状と課題）
・子どもの体験活動が十分にできていない。
・地域の人との関わり、コミュニケーションも十分できない状況が続いている。
・コロナ感染の不安がある中で

これら意見を踏まえ、今年度は子どもたちの直接体験や交流ができる場をつくることになります。そして、コロナ禍、子どもたちの活動も制限されてしまっているため、子どもたちに

運営に関わる方に向けてお話をしたことを伝えてくださいました。実行委員長が、当日は、学生を含む当日参加の区民ボランティアおよそ20名が運営に参

もいっきり遊んで大丈夫だよといふことを伝えたい。いから「おもいっきりあそぼう！」をテーマに地域交流イベント型の開催することになりました。(参照2)



参考2：令和4年度「子ミュフェス」のチラシ。コロナ禍、十分に活動ができない状況もあったが、子どもたちに向かって「おもいっきり遊ぼう！」という想いを込めて、この事業を周知した。

当日運営に参加したボランティアの方からは、「実行委員長から、コロナ禍、大変な状況に直面している地域の子どもたちが、子どもたちの姿を取り戻せるように、おもいつきり遊べる場を安全につくつていきた」という思いを伺つて、すばらしい企画だと感じた。たくさんの子どもや親子が楽しむ姿が見られて、お手伝いすることができるよかったです。運営に関わる方が、「子ミュフェス」の目的や地域の方の思いを知つて、活動に参加することで、安心安全なイベントをつくることができたのではないかと感じています。この事業を通して、新たなつながりがつくれれ、地域で子どもを育む活動の輪がひろがっています。

企画運営と関係づくり」の研修会を開催しました。私は、高井先生のお話の中で、「『市民』としての自分を忘れない」というメッセージが印象に残っています。
8月下旬、私が住む地域で開催された地域交流イベントに、私は運営ボランティアとして参加しました。主催された方々は、コロナ禍、初めてのイベント開催ということで、さまざま感染防止対策を取っていました。しかし、予想を超える参加があり、一部会場内の人数を制限するような状況になりました。私はステージプログラムの進行役をしていましたが、イベントの振り返りをおこなつた際、会場全体の様子や課題などを知ることができました。

私は、「市民」としてこのようない経験をし、「子ミュフェス」開催直前の実行委員会で、受付時のお願いしました。実行委員会で、想定できないことが起こる可能性があることを思つて、この取り組みで大切にしたいことを確認し、当

日を迎えることができました。「市民」として、私自身が地域での暮らしを豊かにする営みが、仕事にも役立つということを体感しています。私は、主催された方々は、コロナ禍、初めてのイベント開催ということで、さまざま感染防止対策を取っていました。しかし、予想を超える参加があり、一部会場内の人数を制限するような状況になりました。私はステージプログラムの進行役をしていましたが、イベントの振り返りをおこなつた際、会場全体の様子や課題などを知ることができました。

実行委員会の進行サポートでは、「子ミュニティフェスタ2022」に開催される学習支援者3つの心がけを見ました。私は、社会教育主事として「子ミュニティフェスタ」に開催され、再発見した学習支援者3つの心がけを紹介します。

①問い合わせ → 質問する
実行委員会の進行サポートでは、問い合わせが重要だったように感じています。話し合いで、一つの文章のなかで一つの問い合わせを行います。また、自由に答えてもらえるようオーブン・クエスチョンで、わかりやすく伝えることを意識しました。どの順番で問い合わせを行うかによって、答えが変わってしまう場合があるため、問い合わせる順番について工夫しています。

例えば、進行役の方が、「活動の内容が入っている間で、話し合いで行います。すると、活動の目的を話すはずが、会議室でできる仕事を探す話し合いになってしまい、活動の目的をあとから付け足すようなことが起こってしまいます。

先に述べたように、なんのために活動をするのか（どうしてその活動がしたいのか）、目的をしっかりと確認し、目的を達成するためには、事業（内容や場所）を考えることが大切です。話し合いで問い合わせによつてサポートするためには、ファシリテーション能力を高める必要があると感じています。

②呼びかけ → 集める・促す
「子ミュニティフェスタ」では、当日の運営ボランティアを募ることになりました。荒川区社会福祉協議会が発行する情報誌に情報を掲載しました。荒川区社会教育専門職連絡会が周知を行つたほか、実行委員の皆さまや私たち職員の呼びかけでボランティアを募集しました。

実行委員長は、つながりがある

荒川区社会教育専門職連絡会では、7月に立教大学特任准教授高井正先生を講師に迎え、「社会教育・活動支援の心がけ」としての気つきと学習・活動支援の心がけ

は、令和4年度は、ウィズコロナで各団体の活動が始動する中、「子ミュニティフェスタ」実施に向け5月から9月までに4回の実行委員会を行いました。私は実行委員長と毎回の流れを確認しながら、会議の進行をサポートしました。(写真3)

はじめに、「子ミュニティフェスタ」で大切にしたいこと

・コロナ感染の影響でさらに子育てが孤立してしまう状況。
（「子ミュニティフェスタ」で大切にしたいこと）

・子どもを中心と考えた活動。
・子どもたちの直接体験と子どもや親子の他者との交流。
・子どもたちがおもいっきり遊べる場。

・各活動を知つてもらい、地域の中で子どもたちを育む活動につなげる。

これらの意見を踏まえ、今年度は子どもたちの直接体験や交流ができる場をつくることになります。そして、コロナ禍、子どもたちの活動も制限されてしまっているため、子どもたちに

運営に関わる方に向けてお話をしたことを伝えてくださいました。実行委員長が、当日は、学生を含む当日参加の区民ボランティアおよそ20名が運営に参

もいっきり遊んで大丈夫だよといふことを伝えたい。いから「おもいっきりあそぼう！」をテーマに地域交流イベント型の開催することになりました。(参照2)

2022-12 社会教育-60

近隣学校のボランティア部に声を

かけて学生さんを募りました。その動きに加え、私は「子ミユフェス」の実行委員会と同時に実施している、地域大学の「荒川コミュニティカレッジ」や「二十歳のつどい実行委員会」など、ほかの事業に参加する区民への呼びかけ意識しました。多くの方がボランティアとして参加してくださいました。

私は、学習や活動の機会をつくることや、新たな出会いが生まれる情報提供を常に意識しています。私自身が積極的に情報収集を行い、効果的な場・機会での情報提供を行えるように人や地域との関係をつくっていきたいと思っています。そのためには、人・地域・情報などをつなぐコーディネーション能力を高めていく必要があると感じています。

③投げかけ～相手に届くようにメッセージを送る

「子ミユフェス」の動きは、当時の社教主事が呼びかけ、横のつ

ながりづくりの必要性や効果な

ど、相手に届くメッセージの投げかけから始まりました。

投げかけは、問い合わせと同じように話す順番を意識すると同時に、相手がキャッチできるタイミングを見計らうことが重要です。相手に届く言葉や手法で伝わるようになります。

私は、投げかけが特に難しいと感じています。私自身が直接投げかけるだけでなく、それぞれの事業担当職員が、地域の取り組みや区・関係機関の事業を知り、学習や活動を希望する区民へ投げかけることができるよう情報を共有することができます。私の役割だと感じています。情報を共有する際、情報提供の影響や効果を伝えていくことが課題です。職員や区民に生涯学習や社会教育によって、人・地域づくりの可能性を伝えていくために私自身が地域づくりにおける社会教育の役割を学び、実践していくことが必要であると感じて

います。

この原稿を書いている10月現在、特別区社会教育主事会では、「社会教育と地域づくり」をテーマに全体研修会を企画・検討しています。私たち学習支援者が生涯学習や社会教育について学び、発信していくように、今後も横のつながりをつくり、さまざまなお話を高めていく必要があると感じています。

私は、投げかけが特に難しいと感じています。私自身が直接投げかけるだけでなく、それぞれの事業担当職員が、地域の取り組みや区・関係機関の事業を知り、学習や活動を希望する区民へ投げかけることができるよう情報を共有することができます。私の役割だと感じています。情報を共有する際、情報提供の影響や効果を伝えていくことが課題です。職員や区民に生涯学習や社会教育によって、人・地域づくりの可能性を伝えていくために私自身が地域づくりにおける社会教育の役割を学び、実践していく必要があります。

私は、投げかけが特に難しいと感じています。私自身が直接投げかけるだけでなく、それぞれの事業担当職員が、地域の取り組みや区・関係機関の事業を知り、学習や活動を希望する区民へ投げかけることができるよう情報を共有することができます。私の役割だと感じています。情報を共有する際、情報提供の影響や効果を伝えていくことが課題です。職員や区民に生涯学習や社会教育によって、人・地域づくりの可能性を伝えていくために私自身が地域づくりにおける社会教育の役割を学び、実践していく必要があります。

や葛藤がありました。交代をお願いした時は、とても心苦しい気持になりましたが、松田先生はすぐに対応してくださりました。いつも代わるように準備してくれていました。いたのかも知れません。

この経験から、私はヘルプが言える関係づくりや、いざという時をもつと意識したいと感じています。他者と共に新しい試みに挑戦し、実践や経験を通して学ぶことをこれからも続け、発信していくたいと思います。

あとがき

「発想する！授業」は、尚絅学院大学松田道雄先生と中央区の安西春樹さんとチーム連載をしてい

i 荒川区地域力向上支援事業 H.P..
<https://www.city.arakawa.tokyo.jp/a016/shougaigakushuu/katsudoshien/r4ko/myunitejgyo.html>

ます。チーム連載は、それぞれの持ち味を活かしてさまざまな角度から提案していく取り組みです。

私は11月号を松田先生に交代していただきました。松田先生の呼びかけで、働きながら無理のない範囲で、お互いにヘルプを言える

関係でチーム連載がスタートしました。しかし、いざ、交代をお願いしたい状況になつた時には、お願いしていいのだろうかと、不安

(註)
中泉 理奈（なかいりな）
荒川区地域文化スポーツ部生涯学習課社会教育主事
編集発行：一般社団法人とちぎ市民協働研究会